

2024 年 5 月 24 日

武蔵野美術大学 学長 殿

海外研修報告書

下記の通り、海外研修の報告をいたします。

記

氏名	所 彰宏	所属	油絵学科グラフィックアーツ/ 版画研究室
		職位	助教

研究課題	イスラム美術・スペイン絵画の研究、および各地域の歴史や風土・生活の取材
研究先機関	トプカプ宮殿、アヤソフィア、スルタンアフメット・ジャーミイ、地下宮殿、ドルマバフチェ宮殿、アントニ・タビエス美術館、ピカソ美術館、ミロ美術館、カサ・ミラ、カサ・パトリョ、サグラダ・ファミリア、ソローリャ美術館、ブラド美術館、ティッセン・ボルネミッサ美術館、ソフィア王妃芸術センター、トレド大聖堂、サント・トメ教会、エル・グレコ美術館、タンネリ・ショワラ、ブー・イナニア・マドラサ、マラケシュ博物館、ベン・ユセフ・マドラサ、バヒア宮殿、エル・パディ宮殿、マジョレル庭園、ベルベル博物館、イヴ・サン・ローラン美術館、オルセー美術館 他
主な滞在地 (国・都市名)	トルコ・スペイン・モロッコ
渡航日程	2024 年 3 月 30 日 ～ 2024 年 4 月 25 日 (27 日間)
研究目的・理由	アラベスクやモスク等に代表されるイスラム美術には、反復する幾何学形態や配色に日本にはない独自の美意識を感じ取れる。モロッコはマティスやドラクロワなど多くの画家に多大な影響を与えた場所であり、特にこの土地の色彩は目を見張るものがあるため、実際に現地に赴き取材・調査を行う。また同じイスラム圏でありながら、トルコはアジアとヨーロッパ、モロッコはヨーロッパとアフリカの間に位置するため、それぞれの文化が混じり合い独特の様相を呈しているように思われる。本研修では、このイスラム文化圏 2 カ国の美術の比較・検証を行う。 スペインではバルセロナやマドリードの美術館を中心に、各作家の作品を鑑賞し研究する。描写方法等を参考にしているベラスケスやゴヤの他、ピカソやタビエス等近現代のスペイン画家の、日本では展示機会の少ない作品を多数鑑賞する。
研究成果発表予定 (展覧会、著書、論文発表等)	2024 年 8 月末に東京都内のカフェ・ギャラリー「Bar Magpie (Magpie Cafe)」にて開催する個展で研究成果を発表予定。

研究内容

本研修ではトルコ・スペイン・モロッコの3カ国を巡ったが、これらの国に共通するのは、いずれも地理的・歴史的な背景から異なる文化と混じり合っており、それぞれの特徴を取り入れつつ独自の文化を築いている点であると言える。例えばトルコ、特にイスタンブールは一つの都市の中にボスポラス海峡を隔ててヨーロッパ側とアジア側に分かれており、スペインとモロッコはそれぞれヨーロッパの南端、アフリカ大陸の北端に位置している。また各国にはキリスト教とイスラム教、あるいは先住民文化など異文化の要素が随所に併存して見受けられ、かつそれらが相互に影響し合っている。言い換えれば「狭間」にある国々であると感じられた。この狭間の文化——異なる文化の双方の要素を持ちながら、それでいてそのどちらでもない独自の文化が育まれている状態——が、研修先を考慮する際に魅力を感じた部分だった。それは版表現にも通じる要素のようにも思えたからだ。

版画は版を介して刷り上がったものを作品とする。版を作成する段階で偶然性を誘発することになり、複数の工程を経て、最終的に完成した作品は当初のイメージから離れたものになることは珍しくない。こういった時、自分の作品でありながら自分以外の何かの手が加わったことによって出来上がったもの、という感覚が起こる。つまり版という「他者」を積極的に取り入れる制作手法であると言える。自己と他者、その狭間にある表現という感覚を持っていたことが、上記の国々に興味を抱いた大本のきっかけであり、研修先として選択した。

もちろん上記以外にも各国毎の研究テーマもあるため、ここではそれぞれの国での研修の記録としての記述に留めるが、本研修を通して得た知見・経験から、版表現へと結びつく上記の「狭間」の要素を今後時間をかけて考察・検証を行い、研究成果として発表する予定だ。

〈トルコ〉

トルコではイスタンブールに滞在した。アジアとヨーロッパの交わる場所として知られており、連日多くの観光客で賑わっていた。体感ではあるが、建造物等の町並みはヨーロッパの文化がベースとしてあるが、人々の生活風景(物や人々が溢れ雑多とも言えるが、それゆえに活気にあふれ異文化が併存・混合しているような様相)は確かにアジア的にも見えた。というのも、以前私がタイに訪れた際にも同様な印象を抱いたのを思い出したからだ。

実際に建造物に入ると、この国が辿ってきた歴史的な背景が文化の形成に大きく寄与していることがよく分かる。例えばアヤソフィアは、東ローマ帝国(ビザンツ帝国)時代の537年に建造され、ギリシア正教の大本山の教会として使用されてきたが、1453年にコンスタンティノープルが陥落しオスマン帝国になると、イスラム教のモスクとして造り替えられた経緯がある。そのため、内部には聖母マリアやイエスなどが描かれたモザイク画がある一方で、アラビア文字のカリグラフィーやアラベスク装飾がふんだんに用いられている。宗教的な問題は現在でも孕んでいるが、造形的な観点で見れば、この背景が極めて特異な様相を呈しているように思われる。また偶像崇拝が禁止されているため抽象的な紋様が多いイスラム美術の中にあって、トプカプ宮殿に展示されていたカリグラフィーについては具象的なものが描かれているように思われるものが散見され、興味深かった。現代の視点で見ればイラストレーションにも通じる面白味を感じた。これもこの国が辿ってきた上記の歴史的背景が関係しているのではないかと考えさせられた一例である。

研究内容

全体を通して、研修を行なった建築物やその装飾等は規模が大きく、豪華絢爛で洗練されている印象を受けた。それはかつての大帝国の栄華から生み出されたものであり、またキリスト教とイスラム教、それぞれの文化が混ざりながら発展してきたことが起因しているのではないだろうか。この点が、後述する同じイスラム圏であるモロッコの美術とは異なる印象を抱かせる要因であると考えられる。

〈スペイン〉

スペインではまず最初にバルセロナに滞在した。バルセロナでの目的はピカソやミロ、タピエス等の近現代の画家の美術館への訪問と、ガウディ建築の見学である。

ピカソ美術館では少年期から各時代の変遷を辿りながら作品を鑑賞することができ、この画家についての考察を深めることができる稀有な美術館であると言える。特にベラスケス作の「ラス・メニーナス」をモチーフにした一連の連作は、このシリーズ作品だけで広い展示会場を埋め尽くすほどの作品数が展示されており、同一モチーフを繰り返し編曲させるかのように扱い制作する手法は大変興味深かった。

ミロやタピエスの作品については、改めてスペインの土地で鑑賞すると、この場所で生まれ育った人間だからこそ作ることができる作品である、という実感が得られた。タピエスの大胆なおおらかな線や、ミロの鮮やかな色彩は、どこことなくアルタミラ洞窟壁画やスペイン陶器の意匠にも通じるものがあると感じた。作者の生まれ育つ場所は、作家性に少なからず影響を与える要素であると思われる。

ガウディ設計の建築物はカサ・ミラ、カサ・バトリョ、サグラダ・ファミリアの3カ所を訪れた。ガウディといえばあまりに独特なデザインの印象が強かったが、まとめて複数の建築物を見ることで、それぞれに通底する設計者の思想を感じることができた。展示されていた資料によると、ガウディは特に自然物をアイディアの源泉にしていたらしい。亀甲や蜂の巣、貝、松ぼっくりやとうもろこしなどの植物、血管など、ありとあらゆる自然物の形態を参考にしており、そういった目で彼の作品を見直すと、確かに上記の要素をはっきりと認識することができた。また外観だけでなく、建築物としての構造の強度や住環境としての機能など、合理的な視点からも考慮して設計しているという。例えばカサ・ミラの屋根裏はクジラの背骨や肋骨をヒントにデザインされた美しい外観をしているが、このレンガのカテナリー(垂直曲線)アーチは、強度が高く安定した構造をしている。また、この屋根裏の空間は居住者の洗濯場としても機能していたようだ。ただ単に特異な見た目のデザインのみを追い求めていたわけではなく、根本には毅然とした設計哲学に基づいて制作していたことがよく分かった。

続いてマドリードへ移動した。マドリードにはプラド美術館やティッセン・ボルネミッサ美術館など大規模な美術館が集中しており、もっぱらこれらの美術館での鑑賞が目的である。

最初にソローリャ美術館を訪れた。ここはスペイン外光派の画家、ホアキン・ソローリャが住居兼アトリエとして使用していた邸宅を改装した個人美術館である。規模は大きくないが、元邸宅であるだけに家具や生前画家が蒐集していた陶器などのコレクションとともに作品が展示されており、ホワイトキューブとは異なる展示空間は趣があり目を惹いた。外はアンダルシア風の庭園になっており、タイル装飾がふんだんに使われ大変美しい。思い返すと、この後に訪れるモロッコの庭園とよく似ていたように思う。スペインは過去にイスラム王朝によって支配されていた歴史

研究内容

があるため、タイルのほかモザイクや幾何学模様など、イスラム美術の影響が随所に見られる。トルコに続き、ここでも異文化の融合の一端が垣間見えたような気がした。

ティッセン・ボルネミッサ美術館には 14 世紀から現代までの作品が年代順に多数展示されており、西洋美術の流れを展観できるようになっている。常設展ではオールドマスターの名作はもちろん、ルシアン・フロイドやリチャード・エステス、ジュリアン・オピーなど、また企画展ではイサベル・キンタニージャの作品が展示されており、現代作家の作品も数多く見られたのは大きな収穫だった。続いて訪れたソフィア王妃芸術センターは現代美術をメインに展示している美術館である。中でも人気の高いピカソの「ゲルニカ」をはじめ、ダリ、ミロ、タピエスなど、20 世紀のスペイン作家の作品を鑑賞することができた。世界でも有数のコレクションを誇るプラド美術館では、ベラスケスやゴヤ、エル・グレコなどのスペインの巨匠の作品を鑑賞でき、中でもゴヤの「1808 年 5 月 3 日」や「黒い絵」シリーズには感銘を受けた。全研修期間を通して、最も印象に残った絵画であったと言える。

ベラスケスやゴヤ、ソローリャなどのスペイン画家の描写は、私の制作において実際的で参考になるように思える。彼らはいずれも具象的に描いてはいるが、いわゆるスーパーリアリズムのように緻密に描写しているわけではない点が共通している。筆致を残し、塗り残しや平面的な処理を施し、あくまで絵としての趣きを尊重しつつも、ある種のリアリティを感じる。その「リアリティ」は感情的な揺らぎであったり、大胆な筆致にも関わらずモチーフの特徴を巧みに捉える描写力であったり、記憶に訴えかけるような光の表現であったりと、もちろん作家によって多様である。ただいずれにしても、上記の感覚を鑑賞者に想起させるようなリアリティを、精細に描き過ぎないようにして表現しているのではないかと感じた。

スペイン滞在の最後はトレドを訪問した。かつて首都として栄えたこの町はどこを見ても美しい景観だが、特にトレド大聖堂は圧巻だった。バロック様式の祭壇・トランスパレンテや、ルネッサンス様式とゴシック様式上下 2 段で作製された聖歌隊席など、精緻に作られた彫刻は荘厳だった。その後サント・トメ教会やエル・グレコ美術館に赴き、エル・グレコの作品を鑑賞した。グレコの作品はプラド美術館などでも展示されているが、「オルガス伯爵の埋葬」などこの場所でしか見ることのできない作品も多く、また画家が生涯を送った土地での鑑賞は感慨深かった。

〈モロッコ〉

マティスやドラクロワに代表されるように、モロッコに魅せられた画家たちは多い。彼らを惹きつけたのは、やはり鮮烈な色彩ではないだろうか。今回の研修では各地域の色彩を取材しつつ、また同じイスラム圏のトルコの美術との違いはあるのか検証した。

カサブランカから入国した後、北部の町シェフシャウエンへと向かった。ここは町中のいたるところが青の色彩で埋め尽くされていることで有名だ。一言で青と言っても、淡い水色から群青色まで、そのバリエーションは幅が広い。この青の中で、多彩な色の服や織物、モザイク、タイル、植木鉢が配され、原色同士がぶつかり合う。日本にはない感覚のように思う。その一因になっているのは、強烈な日差しではないかと感じた。照り付ける陽光の中にあっても、これほど鮮やかな色彩なら視認しやすいように思える。またかつてスペインを追われたイスラム教徒が住み着いた町とも言われているためか、ここでもそれぞれの文化の融合が見られる。

研究内容

茶色いテラコッタの屋根はアンダルシア地方の建物に似ているし、イスラム建築特有である建物の外に庭を作らないという特徴も見られる。この町が歩んできた歴史がこの景観を形作っていると言える。

シェフシャウエンに続いてフェズへと向かった。ここはモロッコ最初のイスラム王朝の都であり、メディナ(旧市街)は迷路のように入り組んでいる。人々の活気あふれる生活や、昔ながらの方法で皮なめしをしている「タンネリ・ショワラ」など見どころも多かったが、特にブー・イナニア・マドラサが印象に残っている。この建物はイスラムの高等教育のための神学校であり、学生の寄宿寮だった場所だ。建物はモザイクやカリグラフィで装飾され、特に壁面に広がる漆喰の彫刻は、あまりに緻密で驚かされた。モロッコにおけるイスラム美術の粋が集められているように思えた。

フェズからは車での移動となり、各所の景勝地を経由しながら時計回りにマラケシュを目指すルートで進んだ。サハラ砂漠のどこまでも続くオレンジ色の大地、トドラ峡谷の絶壁とダデス峡谷のユニークな形態の岩壁。道中次々と様相が変わっていく景観は、この国のバラエティに富んだ雄大な自然を物語っていた。その後オアシス都市ワルザザートや日干しレンガ造りの要塞化された村、アイト・ベン・ハッドゥなどに立ち寄り、アトラス山脈を超えて大都市・マラケシュに到着した。

マラケシュは連日大道芸人や屋台などで賑わうジャマ・エル・フナ広場をはじめ、各地から様々な人々がやってくるモロッコでも有数のエネルギー都市である。またフェズに次いで2番目に古い町であり、歴史に裏打ちされた文化施設も多様だ。マラケシュ博物館には伝統的な民俗性豊かな生活用品等の展示だけでなく、現代のモロッコ作家の作品も展示されており興味を惹かれた。ベン・ユーセフ・マドラサはフェズのブー・イナニア・マドラサと同様イスラム神学校であった場所だ。装飾も似通っているがこちらの方がさらに規模が大きく、全体に施された緻密な彫刻や化粧漆喰、イスラム美術特有のタイル装飾など、改めてその質の高さには目を見張るものがあつた。その他にもマジョレル庭園も印象に残った場所の一つだ。この庭園はフランスのアール・デコの画家、ジャック・マジョレルが造園したもので、彼の死後はデザイナーのイヴ・サン・ローランが買取り経営を始めたという経緯がある。ヤシやサボテンなどの南国の植物とともに竹も多く植樹されており、独特な景観であつた。何より目を惹くのは、庭園内の建物壁面に配された濃いコバルトブルーと、鮮やかな原色の植木鉢だ。シェフシャウエンでも似た体験をしたが、こちらの青はさらに濃く独特であり、また庭園という性質上統一感があり、シャウエンとはまた異なる印象を受けた。

マドラサや宮殿建築を訪れて、同じイスラム圏のトルコと比較してみると、モロッコの美術にはある種の素朴さを感じ、また職人的な技巧を凝らした意匠が多いように思えた。トルコは東ローマ帝国からオスマン帝国に変わるまでキリスト教国であり、先述したようにその影響は美術にも色濃く残っている。対してモロッコはヨーロッパの支配を度々受け文化的影響を受けてはいるが、ベースにはアラブ人によるイスラム文化が根付いているように思う。また国民の3割を占める先住民族ベルベル人の影響も大きいだろう。現地の人々の話では、絵や物を作る時ベルベル人は特定のモチーフを見ながら作るのではなく、記憶の中のイメージを頼りに作っていくようだ。こうした素朴で手工芸的なベルベル人の文化とイスラムの文化が合わさることで、親密さと高い技術を併せ持つモロッコの美術が生み出されているのではないだろうか。

大学授業における
研究成果の還元

本研修にて得た知見や資料を講義等の形で大学授業で発表し還元させる。また研究成果として、研修を元にして着想した作品を制作・発表し、学生に提示する。

研究日程（全滞在期間）

出発日 (現地時間)	出発地 (国・都市名)	到着日 (現地時間)	到着地 (国・都市名)	研究内容等	滞在 日数
3月30日	東京(羽田)	3月31日	トルコ／イスタンブール	イスラム美術(モスクやモザイク・アラベスク)の研究	4泊5日
4月4日	トルコ／イスタンブール	4月4日	スペイン／バルセロナ	ガウディ建築、ピカソやタピエス等近現代スペイン絵画の研究	5泊6日
4月9日	スペイン／バルセロナ	4月9日	スペイン／マドリード	ベラスケスやゴヤ等の古典スペイン絵画の研究	5泊5日
4月13日	スペイン／マドリード	4月13日	スペイン／トレド	エル・グレコの絵画の研究	0泊1日 ※日帰り
4月14日	スペイン／マドリード	4月14日	モロッコ／カサブランカ	モスク・市街地の取材	1泊2日
4月15日	モロッコ／カサブランカ	4月15日	モロッコ／シャウエン	町の青を基調とした配色の研究	2泊3日
4月17日	モロッコ／シャウエン	4月17日	モロッコ／フェズ	スークをはじめとした特徴的な地域での人々の生活・調度品の取材	2泊3日
4月19日	モロッコ／フェズ(イフレン等を経由)	4月19日	モロッコ／メルズーガ・サハラ砂漠	建築物や自然等の風景の取材	1泊2日
4月20日	モロッコ／メルズーガ・サハラ砂漠(トドラ峡谷等を経由)	4月20日	モロッコ／ダデス峡谷	建築物や自然等の風景の取材	1泊2日
4月21日	モロッコ／ダデス峡谷(ワルザザート、アイト・ベン・ハッドゥ等を経由)	4月21日	モロッコ／マラケシュ	人々の生活の取材、及びモザイク装飾や色彩配色の研究	3泊4日
4月24日	モロッコ／マラケシュ	4月24日	フランス／パリ	オルセー美術館の見学	0泊1日 ※トランジット
4月24日	フランス／パリ	4月25日	東京(羽田)	帰国	
備考					

以上

※ 欄が不足する場合は、適宜、行を挿入するなどして記入してください。別紙添付も可。

※ その他特記事項等がある場合は、備考欄に記入してください。

○トルコ／アヤソフィア



○トルコ／トプカプ宮殿



○トルコ／スルタンアフメット・ジャーミイ(ブルーモスク)



○トルコ／地下宮殿



○トルコ／ドルマバフチェ宮殿



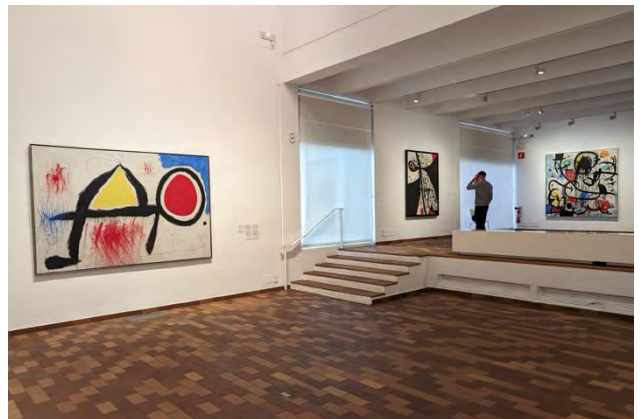
○スペイン／アントニ・タピエス美術館



○スペイン／ピカソ美術館



○スペイン／ミロ美術館



○スペイン／カサ・ミラ



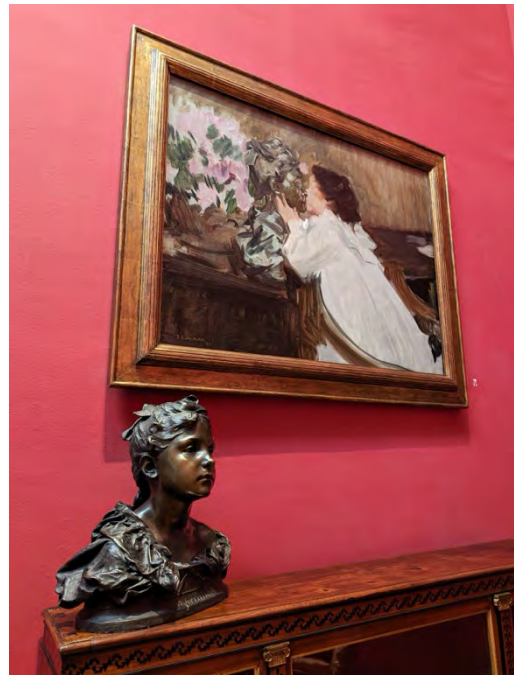
○スペイン／カサ・バトリョ



○スペイン／サグラダ・ファミリア



○スペイン／ソローリャ美術館



○スペイン／ティッセン・ボルネミッサ美術館



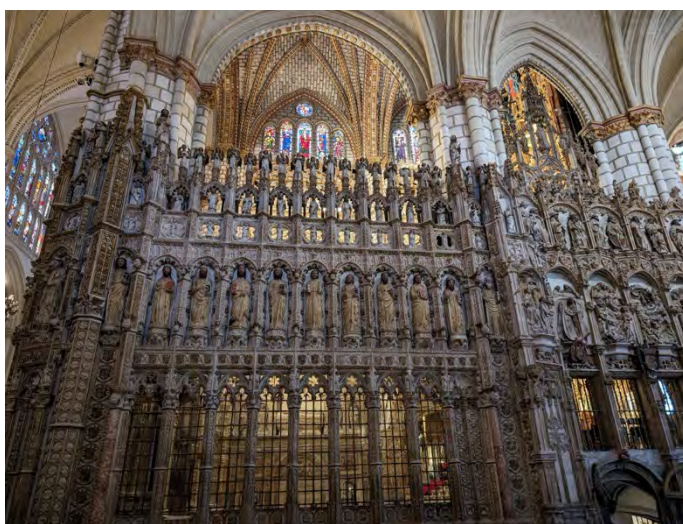
○スペイン／ソフィア王妃芸術センター



○スペイン／プラド美術館



○スペイン／トレド大聖堂



○スペイン／サント・トメ教会(左)、エル・グレコ美術館(右)



○モロッコ／シェフシャウエン



○モロッコ／タンネリ・ショワラ(左)、ブー・イナニア・マドラサ(右)



○モロッコ／サハラ砂漠(左上)、トドラ峡谷(右上)、ダデス峡谷(右下)、アイト・ベン・ハッドゥ(左下)



○モロッコ／マラケシュ博物館



○モロッコ／ベン・ユーセフ・マドラサ



○モロッコ／バヒア宮殿



○モロッコ／エル・バディ宮殿



○モロッコ／マジョレル庭園

